

京都大学での実践に基づく FD ビデオ教材シリーズの開発と展開

辻 高明

京都大学大学院情報学研究科

tsuji.takaaki.4v@kyoto-u.ac.jp

概要：本稿では、著者が NHK 関連団体と進めている「FD のためのビデオ教材シリーズ」①、②の開発と展開状況について報告する。具体的には、アナウンサーの話し方や伝え方の技術を教員の授業力向上に活かそうと作成した FD ビデオ教材①、および、教員団の教科書作りや動画資料集作りなど日常的な集団的教育活動に埋め込まれて存在する FD の発見促進のために作成した FD ビデオ教材②の内容について紹介し、学内での展開状況と今後の展望について説明する。

キーワード：FD (Faculty Development), ビデオ教材, ティーチング・ティップス集, 活動に埋め込まれた FD の発見

1. はじめに

本稿では、著者が NHK 関連団体と進めている FD のためのビデオ教材 (以下、FD ビデオ教材) シリーズ、FD ビデオ教材①「大学教員向け ティーチング・ティップス集」、FD ビデオ教材②「FD を“やる”から“発見する”へー活動に埋め込まれた FD ー」の開発、展開状況を説明する。

2. FD のためのビデオ教材の開発と展開

2.1 制作の背景、動機

現在行われている FD の典型的な方法のひとつに公開授業・検討会がある。それは、他の教員の授業を参観して議論する FD の方法であり、授業を見て語り合うことを通じて、教員の集団的自己意識の形成や同僚性の生成が目指されている。著者も本学の FD 検討委員会主催の公開授業・検討会に 15 回程度出席している。

しかし、参観者は毎回大変少ない。また、初中等教育で行われている研究授業・授業検討会では、通常、教員らが授業で対象にする内容や、生徒に関する情報を十分に共有し合っているが、大学・大学院の授業の場合、教員らは専門分野が異なるため、授

業内容が必ずしも共有されていない。さらに、授業者、参観教員ともに受講生の名前や顔を知っていることは稀である。従って、授業者、参観教員が共有し合える対象は、教壇の上に立っている授業者の振る舞いやティーチングスキルであり、授業検討会での議論も、結局そうした話題が中心になっていると感じてきた。

そうした状況を踏まえ、著者は、まず、教員がティーチングスキルの向上のために自学自習形式で取り組む FD ビデオ教材①の開発を構想した。次に、教員の集団的自己意識や同僚性の生成については、公開授業・検討会のように、授業を媒介に、つまり、授業を見て語り合うことを通じてそれらの生成を目指すのではなく、教員団の日常的な集団的教育活動の中にそうした要素を見出すことが重要であると考え、FD ビデオ教材②の開発を構想した。

2.2 FD ビデオ教材①「大学教員向け ティーチング・ティップス集」

FD ビデオ教材① (写真 1) は、アナウンサーの話し方や伝え方の技術を教員の授業力向上に役立てようとして作成した教材 (辻 2010a) であり、NHK 放送研修センターのアナウンサーが大学教員役を演

じ、「スライドショーを分かりやすく進める」、「ポイントを際立たせる」、「質問で学生に考えて貰う」といった 36 の講義術を、模擬授業を通じて、実演、解説している内容である。本ビデオは一昨年度作成した。各項目は6~7分程度に収め、Before-After形式で問題点や改善点が強調されるよう工夫している。表1に具体的な項目とティップスの例を示す。



写真1 FDビデオ教材①

FDビデオ教材①は、読売新聞(2010年3月28日)、学内向け広報誌「京大広報」2010年6月号の「話題」、国内向け広報誌「紅薊」18号の「京都大学の動き」に報道、掲載された。

表1 ティーチング・ティップス集の項目

項目	ティップス
1. 講義の目的を明確にする	・講義はまず結論から ・つなぐ言葉で論旨をはっきりさせる
2. 話し癖を直す	・空白に耐えて間投詞を取り除く ・語尾延ばしと語尾上げを言い切ることを取り除く ・自然に話すには等拍にする
3. 講義ノートで記憶をリフレッシュする	・講義ノートを書き換えて生き生きと話す ・始める前に講義ノートを声を出して読んでみる ・講義ノートを目で構成がわかるように書く
4. ポイントを際立たせる	・内容を絞り込む ・具体的に表現する ・卓立でキーワードを際立たせる
5. 話しにメリハリをつける	・間で話をわかりやすく展開する ・チェンジオブペースで話しの内容と枝葉を分ける
6. 言葉を活かす	・説明と言い換えて専門用語を活かす ・やめたいこそあど言葉 不確かな言葉 〴〵言葉 ・擬態語や擬音語を使いこなす
7. 自然な口調で話す	・長い文を主文と補完文に分ける ・母音は舌の動きで作る ・子音の発音は口の力を抜く
8. 聞きやすい声で話す	・講義前に声の調整 中央席の学生と雑談してみる ・声がかれたら 声帯を休ませる 湿度を保つ 身体をほぐす ・状況に応じてマイクを選ぶ
9. 黒板を上手に使う	・板書の文字を精選する ・書くのは 講義の目次 公式やデータなどの重要事項 質問で引き出す学生の理解 ・黒板で対話しながら講義する
10. スライドショーをわかりやすく進める	・情報量をコンパクトに ・ハンドアウトは別に作る ・アニメーションで注目点を強調 ・発表者を浮かび上がらせる ・聞き手に合わせて進行する
11. 質問で学生に考えてもらう	・質問で 意図を学生にわからせる ・学生全員に考えてもらう ・考えて答える質問をする
12. 話し合いで内容を深める	・学生の試行を広げる一言を ・話し合いの鍵は 見守る我慢 ヒントを出すタイミング

FDビデオ教材①は、京都大学内 28 部局 300 名以上の教員から配布依頼があり、それら教員にDVDとして配付した。視聴した教員からは表2のような感想があった。現在、インタビュー、メール調査により、教員の視聴後の感想や活用事例を集積している。

表2 視聴した教員の感想例

<p>感想例①: 「ティーチング・ティップス集」の様々な反面教師役を演じるプロのアナウンサーの姿に、講義中の自分を容易に見つけることができました。見てはならないのを見たという後ろめたさの中で、誰からも教わることはないまま来てしまった自らの話し方を密かに見直しざるを得なくなってしまいました。(情報学研究科・教授)</p>
<p>感想例②: 技術的に的確なアドバイスが、模擬授業を通して説明、解説されており、これは、誰にでも役に立つ教材だと感じました。できるといいと分かっていてもなかなかやれない項目が多く、このモデルをもとに自分の講義を点検することができました。(教育学研究科・教授)</p>
<p>感想例③: 早速、内容を拝見させていただきました。話し方や、発声など基本的な内容から、スライドショーの使い方、質問や学生 同士の話し合いのさせ方など応用面に至るまで簡潔にまとまっており、実用的な教材になっていることに感じました。前半は、教員のみならず、学生の研究発表などにも共通のポイントも多く、指導の役にも立つと思いました。個人的には、ポケゼミなどで学生に質問したり、自ら考えさせたいと思っている反面、なかなか思うようにいかず、学生のナイーブさや消極性とどう向き合っていくべきかということに関心がありましたので、特に後半のコンテンツは役にたったと思います。実際の現場で試してみながら、より理解の深い授業の実現に活用していきたいと思えます。どうも有り難うございました。(生存圏研究所・准教授)</p>
<p>感想例④: 教材のメッセージそのまま、また過不足もなく(収録時間の点も含め)、よく考え抜かれた内容だと、いたく感心しました。話し方の部分は、多くの場合、改めて自己点検する機会となりました。授業の進め方については、そうしたこともできるのかと学びました。どこまで現実にはできるか、今後の課題ですが、心がけてゆきたいと思えます。それにしても、さすがは話のプロ、聞いているだけで、自然と自分の話し方の点検をすることができます。今後も、時々見ながら、話し方や授業の進め方について振り返る機会としたいと思えます。御提供いただきましたことに、改めて心よりお礼申し上げます。(地域情報統合センター・准教授)</p>
<p>感想例⑤: 自分の講義を振り返るきっかけになる点が良かったです。講義を改善したいと思ったときに、どこを改善すればよいか分かりません。改善前と改善後の具体例があって、ならやってみようかと思えました。今、いろんな大学で授業の相互評価ってやっていますが、評価される側にはなりたくありません。学会発表なら事前に練習ができますが、90分の授業はそんなことはできません。授業は他の教員に評価されたくないです。(情報学研究科・助教)</p>

感想例⑥：『ティーチング・ティップス集』を視聴しました。実際に映像で before と after を比べるような仕方で見ると理解度も違いますし、具体的にどうしたらよいかはかなり納得できるというメリットがあるように思います。特に私の場合、話し方があまり上手でないと自分でも思っているのですが、気になっているポイントが次々と（それも非常にリアルな演技で）指摘されました。ティップスを参考にしつつ、改善を試みていきたいと思えます。それから、映像の中で、「こういうことをしてもよいのだろうか」という疑問・不安に対するコメントがあったのはとてもよいと思いました。（文学研究科・PD 研究員）

2.3 FD ビデオ教材②「FD を“やる”から“発見する”へー活動に埋め込まれたFDー」

FD ビデオ教材②「FD を“やる”から“発見する”へー活動に埋め込まれたFDー」（写真 2）は、教員の日常的な集団的教育活動に埋め込まれて存在する FD の発見を促進するために作成した教材（辻 2010b, 2010c）である。それは、教員団の集団的教育活動に焦点を当てた内容であり、昨年度作成した。本ビデオでは、学内複数部局の教育研究グループの教育活動に着目し、FD を授業改善だけに限定するのではなく、教員団の教科書作りや動画資料集作り、共催授業といった「活動」の中にその要素を見出すことの意義を投げかける内容になっている。また、教員たちの教育活動の省察と FD の発見のためにワークショップの手法を用いている。

本ビデオでは、まず、著者が自ら関わっている、情報学研究科の教員が議論を積み重ねてフィールド情報学という新しい分野の「教科書」を作成した活動に埋め込まれた FD について紹介した。次に、いくつかの部局で現場調査を行い、FD とは意識してやっていないが実質的に FD になっていると思われる教員の集団的教育活動を選出した。そして、それらの活動を取り纏めている教員を集め、それぞれの活動を紹介し、FD の要素について議論し合う対話型のワークショップ（写真 3）を開催した。

本編では、情報学研究科の著者と、教育学研究科の K 教授（グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」拠点リーダー）、人間・環境学研究科の Y 教授（前・高等教育研究開発推進機構長）、工学研究科の N 准教授の学内 4 部局の教員が出演した。一連の内容は、NHK プラネットの撮

影、編集の支援を得ながらビデオ化した。このビデオ教材が議論誘発装置となり、教員たちの間に日常的な集団的教育活動に埋め込まれた FD の発見について議論が生成されることを志向している（辻 2011a）。



写真 2 FD ビデオ教材②

FD ビデオ教材②は、京都新聞（2011 年 2 月 18 日）、KBS 放送（2011 年 2 月 25 日）、京大広報（2011 年 2 月）「話題」に報道、掲載された。

FD ビデオ教材②も、学内の教員を中心に配布依頼があり、現在 DVD として配布を開始している。



写真 3 対話ワークショップの様子

3. 今後の展開を想定した取り組み

FD ビデオ教材①、②の配布後、多くの教員からコメントが得られ、また、自身が実践改善に取り組んだ興味深い実践事例（ケース）も集まりつつある。今後は、それら事例（ケース）を媒介にして教員同士を繋ぎ合わせる「場作り」の方法論を構築していく予定である。その試行研究として、現在、知的書評合戦「ビブリオバトル」の方式を「場の設計論」として応用した教員向け FD ワークショップ“FD バトル”を設計し、その実践研究を進めている（辻 2011b）。

ビブリオバトルとは、「人を通じて本を知る、本を通じて人を知る」、「読書をスポーツに」などのキャッチフレーズで親しまれる書評を媒介としたコミュニケーションの場作りの手法である（谷口ら 2011）。その流れは、①登壇者が読んで面白いと思った良書

を持って集まる。②順番に一人5分間で本の魅力をプレゼンする(各々の発表の後に3分間参加者全員で議論を行う。)③「どの本が一番面白いと思ったか」を基準に発表者・聴衆全員で投票を行い、最多票を集めたものを「チャンプ本」として決定する、の3ステップに分けられる。

そして、このコミュニケーション方式を教員の社会的相互作用場の設計論として応用し、さらに、「書籍」＝「他の教員の授業」と置き換えたFDワークショップが“FDバトル”であり、現在、学内の教員対象に数回実施している(写真4)。その流れは、①登壇者は「自分が魅力を感じる他の教員の授業」を一つ探してくる。②順番に一人10分で、独自の表現方法により、その授業の魅力をプレゼンする(各発表後に5分の全体議論の時間を設ける)。③参加者全員(登壇者、聴衆)の投票でチャンプ授業(最も魅力を感じた授業)を選出する、の3ステップに分けられる。FDバトルは、「人を通じて授業を知る、授業を通じて人を知る」ための「授業紹介を競技に」した教員向けワークショップである(図1)。



写真4 “FDバトル”の様子

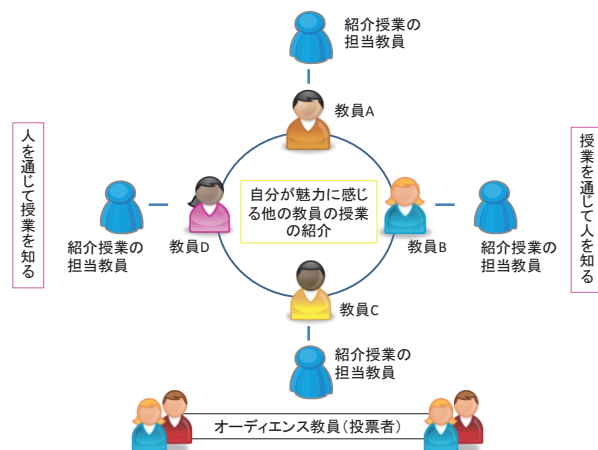


図1 “FDバトル”の構成

このFDバトルの設計と実践の研究成果をベースにして、FDビデオ教材①、②の活用から得られた実践改善事例(ケース)を媒介にして教員同士を繋ぎ合わせる場作りの方法論の構築を進めていく予定である。

参考文献

- 辻 高明「ビデオ版ティーチング・ティップス集の開発」京都大学第16回大学教育研究フォーラム発表論文集, pp.82-83, 2010a
- 辻 高明「FDにおける教員の個別性と集団性に関する事例的考察」日本協同教育学会第7回大会論文集, pp.20-21, 2010b
- 辻 高明「FDとプロジェクトマネジメント」国際プロジェクト・プログラムマネジメント学会2010年春季研究発表大会論文集, pp:247 - 255, 2010c
- 辻 高明「大学教育改善とP2M -FD (Faculty Development) を対象にして-」国際プロジェクト・プログラム学会2011年春季研究発表大会講演論文集, pp:64-72, 2011a
- 辻 高明「ビブリオバトルの方式を応用したFDワークショップの設計と実践」日本協同教育学会第8回大会論文集, pp:20-21, 2011b
- 谷口忠大, 須藤秀昭「コミュニケーションのメカニズムデザイン-ビブリオバトルの発話権取引を事例として-」システム/制御/情報, Vol.55, No.8, pp:339-344, 2011

本研究は、科研費・若手研究(B)「知識創造を促進するワークショップ・デザインに関する研究」(研究代表者:辻 高明, 研究課題番号:21700814, H.21年度 - H.22年度, 総額:2340千円)、京都大学若手研究者スタートアップ研究費「教員間の競争と協働を通じた相互学習を促進するFDビデオ教材の開発」(研究代表者:辻 高明, H.23年度, 総額:550千円)の成果の一部である。